

「大豆300A技術」の導入で安定多収生産の実現を！

大豆栽培では、これまで播種時期が梅雨と重なるため、湿害による発芽不良により、単収、品質の著しい低下が問題とされてきました。この解決のため、地域の気象条件や土壌条件に応じた新しい耕起・播種等技術(大豆300A技術)が開発されました。この技術の導入により、苗立ちを確保することで単収の安定、向上が図られます。

○耕起・播種技術

大規模経営向け

湿害程度
小

1. 「不耕起播種技術」
・稲、麦、大豆に汎用できる播種機を開発(6条用250万円/台)
・耕起・整地を省略し、直接播種
・汚粒低減、表面排水性向上

中

湿害軽減対策

2. 「浅耕播種技術」
・既存のロータリー播種機の簡易改造と調整による低コスト技術

①黒ボク土において、種子直下を耕起せずに堅く残し、排水性と保水性を向上

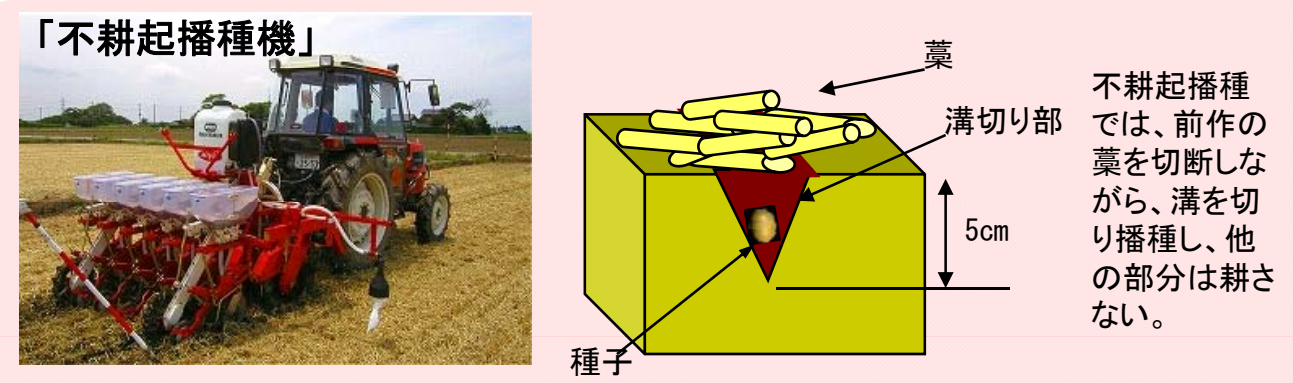
②東海地方に多い、クラストができやすい黄色土や赤色土において、土壌表面5cm程度を耕起、同時に小明渠を作溝し、クラストができにくく、排水性も向上

大

3. 「耕うん同時畝立て播種技術」
・十分に碎土し、高畝を作るアップカットロータリーを活用(3条用 本体93万円/台、麦等の播種可)
・日本海側に多い灰色低地土等の重粘な土壌の排水性を改善し、出芽、生育が向上

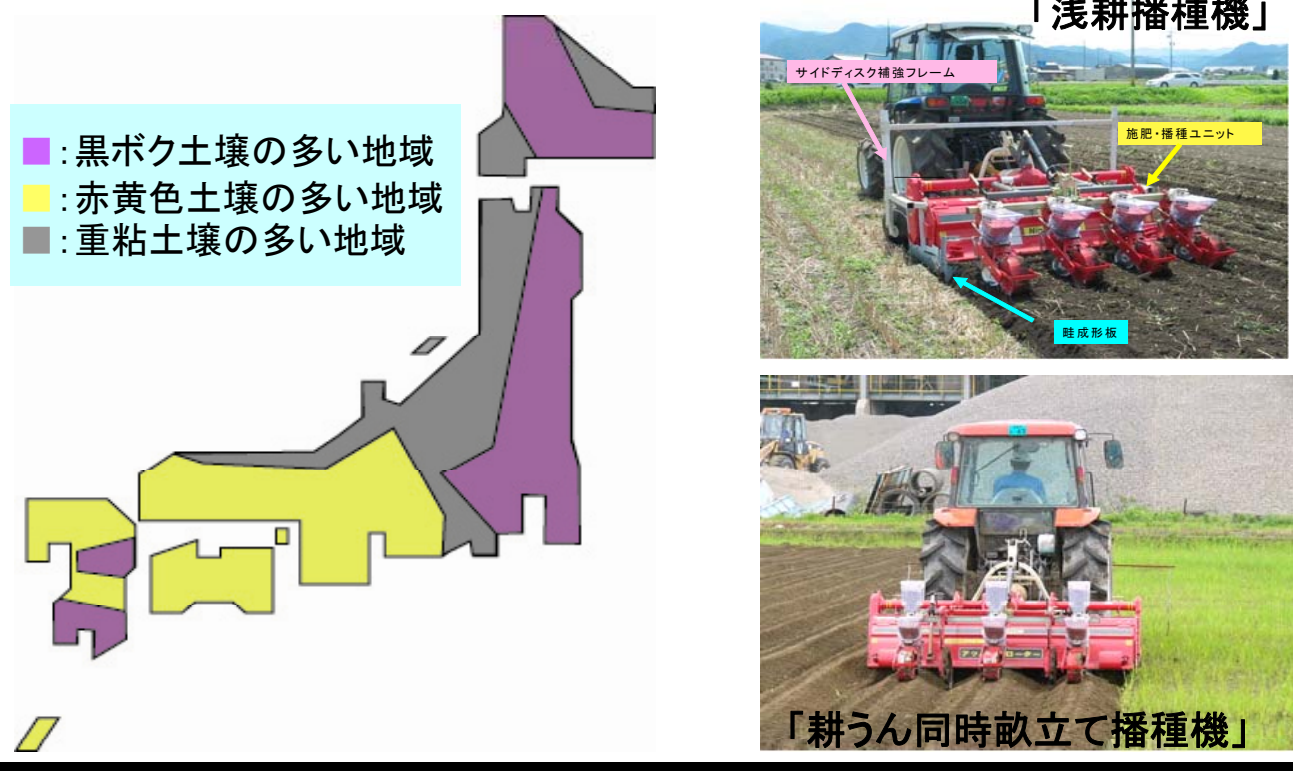
「狭畦省力栽培技術」
・倒伏に強い品種(ユキホマレ(北海道)、おおすず(東北)、タチナガハ(関東)、サチユタカ(中国、九州)等)を狭畦幅(30cm)で栽培
・栽培期間中の中耕・培土作業(2回程度)を省略

「不耕起播種機」



不耕起播種では、前作の藁を切断しながら、溝を切り播種し、他の部分は耕さない。

「浅耕播種機」

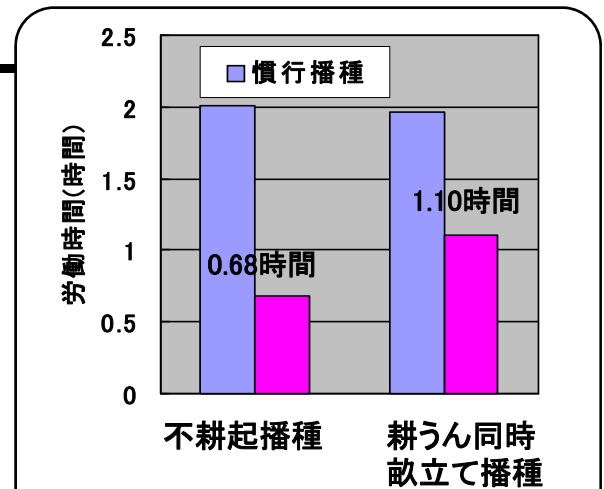


「耕うん同時畝立て播種機」

■: 黒ボク土の多い地域
■: 赤黄色土の多い地域
■: 重粘土の多い地域

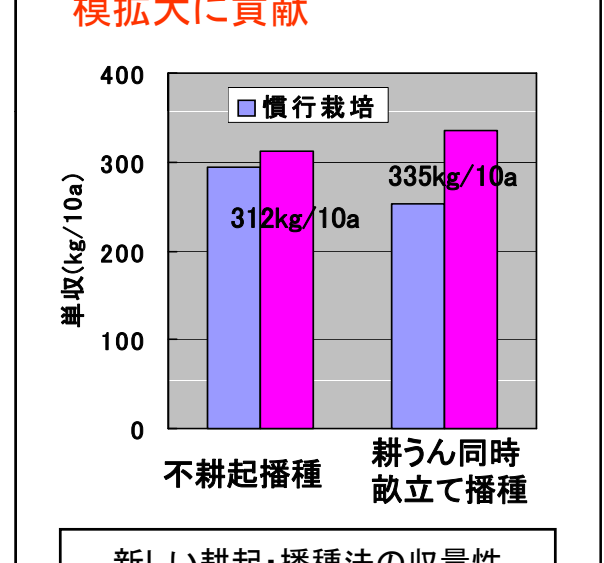
○経営上のメリット

耕起から播種に要する労働時間



・労働時間が大幅に削減し、播種適期が広がるため、規模拡大に貢献

新しい耕起・播種法の収量性



・単収300kgとりが可能
(中央農業総合研究センターによる実証試験)